

## My「NORASAN'S」ブログより

### 団塊エッセー 1 2007.4.25

団塊世代とは1947年から1949年の間に誕生した人を言うらしい。その二ヶ月前に誕生した私も「団塊世代」に入れてもらえないかなと常々思っている。一度、堺屋太一さんに1946年11月まで追加注文しようかと考えている…。たった二ヶ月の違いだから、団塊世代のつもりで自由に文にしてみたい。



八重桜 満開過ぎて 吹き溜まり

「吹き溜まり」なのか、「吹き溜まる」のか・・・とにかく、定年で仕事場が無なるのは大変らしい。ある人は「我慢できずに、前の職場でボランティアで働いている。」と言っていたし、「次の職場までの空き期間は気が狂いそうだった。職場が決まってホットした。」と言っていた人もいる。色々忙しく飛び回っている私でさえ、チョットの空き時間を「何だコリヤこの時間は！」と思ってしまう。職場人間だった人が、「全部あんたの時間だよ」となったら地獄みたいなもんだろう。この写真の「吹き溜まり」に集まっても、夕焼けに光るような自分でありたいナー。。。と思う。

## 団塊エッセー 2 2007.4.27

こんな時代は不幸だったのか？

裸電球・ポットン便所・薪・たらい・オクド・狭い家・・・こんな時代は不幸だったのか？

子供が薪を割り、オクドでご飯を焚き、けむいけむいと目をしょぼつかせ。母が七輪でさんまを焼き、丸いちゃぶ台を囲んで食べた時代は不幸だったのか？

家族みんなでお風呂屋へ出かけた時代は不幸だったのか？

駅まで父親を、傘を持って迎えに行った時代は不幸だったのか？

檜炬燵（ヤグラコタツ）を中心に、足を放射状にして寝たあの時代は不幸だったのか？

冬の寒い中で、凍える水で顔を洗ったあの時代が不幸だったのか？

肥後守（折りたたみナイフ）を持ち、お宮の木の枝で木刀作りをして、手に怪我をして叱られた時代は不幸だったのか？

あの時代には「もの」は無かった。けど、社会の絆が、地域の絆が、家庭の絆が溢れる程有った。「絆」と「もの」どちらが好きですか？ どちらが「人」を幸せにしますか？



昔使っていた檜炬燵とちゃぶ台

## 団塊エッセー 3 2007.4.29

### 馬糞か牛糞か

幼稚園へ通っている道に、糞がよく落ちていた。まだまだ馬と牛が荷物運搬の主力だった。我々幼稚園仲間では「馬糞は足が速くなる」、「牛糞は遅くなる」と決めが有った。誰が決めたか知らないが、先輩からのずーと引継ぎかと思う。だから、馬糞が落ちていれば靴で踏んだ。今、考えてみれば馬糞は踏んでも靴は汚れなかった。牛糞は軟らかかった。牛糞を避けようという生活の知恵が幼稚園児にもあったのか？そんな馬糞・牛糞の発生元が通う馬蹄屋さん（馬けいさんと言っていた）が近くに有り、蹄鉄の交換をじーと眺めるのも楽しかった。飴屋さんも近くにあり、おじさんの飴を延ばす仕草を楽しく見物した事もある。誰も叱らなかったし、道からすぐ眺められる場所が労働の場でもあった。働くおじさんに出会える場が身近にあった。



馬糞（ばふん）

## 団塊エッセー 4 2007.4.30

### しょんぼけ

今は死語となった「しょんぼけ」。辞書に肥桶とありました。我々が使っていたのは「しょんぼけ」。辞書には無いが、多分「小便・桶」が「しょんぼけ」になったのではないかと考察している。この「しょんぼけ」を農家の人が住宅へ馬車で汲み取りに来ていた（汲み取り三輪とかバキュームカー以前です）。馬車に肥桶を沢山積んで帰って行く。ポチャポチャ音をたてながら。その馬車の後ろへ鼻をつまんでチョココンと腰掛ける。車（馬車ですが）に乗ることが無い時代には、「しょんぼけ馬車」でも乗れることが楽しかった。農家の家はだいたい下郷にあったので、途中の弁天様で降りて歩いて帰った。臭くても楽しい「小旅行」だった。



しょんぼけ（肥桶）

今では「絶滅危惧種」となってしまった。

## 団塊エッセー5

### カチン玉とパンキー

カチン玉 (1955 年頃)



遊び場の外壁はこの写真のように板囲い、反って、曲がって、めくれて・・・戦後を引きずっていた頃

小学生の頃はカチン玉で遊んだ。遊んだと言っても「カチン玉」の奪い合い。相手の玉に当てたら、その玉が貰えたり、道に書いた枠の中へお互い何個か入れて、王様を決め、その玉を出したら、その人の物となる。パンキー（メンコ）も似たようなもので、お互い同じ数（多い時は 100 枚位）パンキーを出し、これも王（だったかな）を決めて、パンキーをグチャグチャに混ぜ、王をパンキーでその山の中から出した人が全部貰える。金ではないが金で買ったパンキーの奪い合い。こんな遊びが流行り、学校から帰ったら毎日やっていた。私はカチン玉は下手だったが、パンキーは得意で、自分の背の高さ位までパンキーを集めた。今の子供はバーチャルな遊び中心になってしまったが、パンキーの様な遊びも時には必要かと思う。戦略は必要だし、手先の鍛錬にもなる。今同じことをすれば、負けた子の親が勝った子の家へどなり込みそうだが・・・。昔は、大人の世界と子供の世界がはっきり別れていた。

## 団塊エッセー6 2007.5.4

### 将来の読み方

「将来をどのように読むか」でこれからの生き方が変わる。経済・食料・エネルギー・気候変動等考えただけでも、60歳を越えた人間にとっては「どうでもいいやー」となりそう。しかし、決まった給料が入らない分だけしっかり予測を立てないと、何年か前のロシアで「卵を買ったら年金が無くなった」が日本の現実になるかも知れない。今後を予測して、人生設計をしよう。

#### < 今後の予測 >

- 1 消費税は参院選後必ず上がる。10%は覚悟をする。
- 2 インフレになる。燃料・食料からじわりじわりと。
- 3 温暖化で台風が荒っぽくなる。米国ハリケーンのように。
- 4 世界的な食料不足となる。食料がエタノールに化ける。
- 5 円安に拍車がかかる。円では利息がつかないもんね。

#### < 我々団塊世代に出来る事は >

- 1 働く。
- 2 自分で食料生産をする。できれば販売まで。
- 3 節約する。
- 4 年金に頼らない生活設計をする。
- 5 家は作らず、公営住宅に入る（壊れても直してくれる）。
- 6 早めにお迎えに来てもらう。

#### < 私に出来ることは >

足腰を鍛えて健康な体作りをしながら、これで設計をしよう！もう一つ、ポックリ寺へ行き「ポックリ」行けるように願います。

2010年の円高は予想できませんでした。国債1000兆円発行まで待っていれば円安は間違いないかな？

## 団塊エッセー7 2007.5.8

### 週末農業

週末農業を始めて10年になる。今は定年農業となったから、いつでも農業に関わることができる。生活費を稼ぐ目的でもないのに、綺麗な野菜とかにあまり注意を払う必要もない。自分で食す野菜だから安心な作物にしたい。そのような事で図書館で農法についての本を借りて読んでいます。その中で目からうろこの本を紹介したい。一般的な農業の本は、蒔く時期・肥料・追肥・収穫・害虫駆除・病気の防除を中心とした本が大勢だ。今日読んだ「わら一本の革命」には驚かされた。題名も「革命」とあるように、農薬も肥料も使わずに米・麦と交互に作る。自然の道理に合った農法を人生の大半をかけて考え・実践してきた経過である。

私のこれまでの農は、化学肥料を当然のように使い、草を退治し、虫を潰し・・・だったが、こんな農法は完全に否定されていた。化学肥料が海の赤潮を作っているとも。井戸水が飲めなくなったのも化学肥料と関連があるような気がした。安心して食べられる野菜をとの思いが、知らずに自然を傷めている事に愕然とさせられた。「農は人間の生き方そのもの」だとの考え方をもう少し読んで理解したい。

農を宗教・哲学・エコロジーの観点から語る本と理解した。関心のある方は読んで下さい。

わら一本の革命(P205)から

人間も、快食、快便、安眠ができれば上出来とせねばならぬだろう。食べるものがおいしくて、楽しく遊び、よく寝る者こそ妙好人である。

(妙好人・・・行状の立派な念仏者)

## 団塊エッセー8

### 定年

「定年とは全ての時間が自分のもの」と了解した。義務の時間から自由の時間へ、時間管理の大革命だ。我が家の庭にいるクマバチの写真を撮りながら、昔出来なくて今出来ることを考えて見た。小・中学時代は昆虫採集と称して「虫の殺戮」を繰り返していた。最初は注射で殺し、途中から簡易な方法「毒壺」を覚え、「毒壺」へ放り込んで殺した。その頃学校の図書館でファール昆虫記を読み、ファールの観察姿勢に驚嘆はしたが、ゆっくり観察する時間を自分は持ち合わせていなかった。ただ殺戮し、箱に並べて昆虫標本で終わっていた。定年を迎えた今は十分な時間が有る。昔と比べれば格段に虫は少ないが、我が庭にも農園にも虫達はいる。この虫達に時間潰しを手伝ってもらう他ない。これからは「発言も主張もしない虫達」の代弁ができないか考えてみよう。それは「自然の代弁」になるかも知れない。まずは、庭と農園でジーーーーと周りを見渡すことから始めようか。それが「虫達の殺戮」への贖罪となることを祈り。



雨蛙の夫婦かな？

## 団塊エッセー 9 2007.5.13

昔の職場の同僚が . . . .

昨日（5/11）の新聞に「豊川のゴルフ場で警備員殺される」の記事、年齢は（60）とあった。豊川で60歳、私と同じだなーと聞き流していた。深夜のニュースで同じ事件を報道していた。その時は被害者の顔写真も放映された。驚いた！改めて名前を確認した。昔の職場の同僚が被害者だったではないか。最近では殺人事件を聞いても驚かなくなってしまうが自分だが、顔見知りの方が事件の被害者になってしまった現実にはショックだった。

昔、田舎では不在にする時も家には鍵をかけなかった。しかし、今では「不審者としゃべるな さわるな ちかよるな」という看板が田園地帯に立っている。鍵をかけない時代は、もう遠い過去になってしまった感がある。この看板に従えば「人助け」、「人と人の出会い」も考えられない。この看板を見ながら子供達が学校へ通っていると思うと将来が心配だ。鍵を掛けない社会と常に警戒しなければならない社会。私たちの世代は、後者のような危険な社会の構築に手を貸してきたのではないか？便利さと引き換えに、心の豊かさと安心して生活できる社会を放棄したのかも知れない。考えただけで心が痛む。残念だ。同僚だった被害者の冥福を祈り、事件の早い解決を期待している。



おねしょ(夜尿、寝小便)

広辞苑でおねしょを調べると、おねしょ(幼児語)夜尿、寝小便とある。私には大変身近な言葉だ。世に子供の「おねしょ」に悩む親は多いが、私の体験から「おねしょ派」の子を擁護したい。「おねしょ派」の子は、布団の中へ「オシッコ」をしているのではない(私の経験では)。オシッコをしなればと、暗い中を寢床から出て、暗がりトイレまで行き、朝顔(男性小便用便器)に向かってしっかり「オシッコ」をしている。しっかりトイレへ行き「オシッコ」をしているのだ。まずい!と気付くのは、腰の周りにイヤな感じを抱いた時なのだ。本人はしっかりトイレへ行っている。あくまでも、布団の中をトイレ代わりしたのではないのだ。

私の場合は年齢的に遅くまで「おねしょ」をしていたが、ある歳からピタリと止んだ。これは心と体のバランス(子供から大人への成長)が関係しているのではないかと思っている。心と体の綱引きが、心側に軍配が上がった時に「おねしょ」は止むのではないか。私は「おねしょ」で母から叱られた記憶があまりない。一生懸命に「朝までには体温で乾かそうと」と努力し、早めに押入れに布団を隠した努力はあったが、多分あの二オイまでは消せなかったと思う。母から叱られなかったのが救いだった。へそ曲がりの私は叱られたことにより、逆に、「おねしょ」がトラウマ( )となり、長く長く悩まなければならなかったと思う。

世の親に、「おねしょ」は叱る問題でなく、精神的な成長できる環境を整えることが親の責任と訴えたい。叱っても、ミミズの黒焼きを飲んでも直らないと。

(トラウマ・・・精神的外傷)

## 至福の時（農園にて）

農園へ行き、虫を追いかけずに座って待つ。そうすると虫が見えて来る。見えて来るのではなく、虫から「ボクはここにいるよ」と伝えているのかも知れない。少年時代は違っていた。ただ追いかけて、追いかけて回し捕まえて毒壺へ入れていた。今は虫を待つ時間と、虫の心を感じる余裕がある。そして雑草を見つめる余裕がある。

一人だけの時間、一人だけの空間、一人だけの空、「至福の時」。

蟻地獄（蜻蛉の幼虫の住処）

泥蜂の巣・どんな蜂が作ったのだから？



自然の造形は素晴らしい。原子爆弾は作れても、花びら一枚作れない。人間なんて、自然の前では赤子にもならない。そんな人間でも「母なる自然」を壊すことは出来る。一生懸命壊してる。赤子以下の人間は、「壊してる」と理解しないけど。一生懸命壊してる。

## 団塊エッセー12(亀井勝一郎他) 2007.5.22

### 亀井勝一郎に想う

倉庫から古い本を運び出し、暇な時間を使おうと考えた。出てきた本の著者は、亀井勝一郎・串田孫一・石丸梧平・島影盟。この本の目次に並んでいる言葉は、「人生の目的とは」、「人生の幸福」、「信仰と自由」、「友情と恋愛」、「孤独と幸福」等、40年程前の青年のテーマが並んでいる。最近のメディア氾濫の時代には不似合いな言葉となってしまった。

私の青春時代は「悩む」ことがその証しであり、悩みの中で悶々と時を過ごした。私も現代に青春を過ごしていたら、車・異性・携帯・メール・音楽・TV・スポーツ等に時間を費やし「悶々」などと言う言葉を覚えずに、ひたすら時間と小遣いを使っていたかもしれない。

私の青春時代には「物」は無かったが、人生を語り合う「友人」と「思考」の時間が有った。その後の人生でどれ程役立ったことか。著作者と友に感謝したい。



## 電気釜

私の幼少時代は江戸時代から変わらないことが数多くあった。ご飯を炊く行為はその最たるものだ。縄文時代かそれ以前より、この日本に連綿と続いて来た行為だ。それが「電気釜」が一変させてしまった。それまではオクドにお釜が当たり前で、大いに手数が必要だった。薪を割る、火をおこす、お釜でご飯を炊く、火加減を見る。それと合わせておかずを作る。子供と母親の共同作業だ。この共同作業の中に、刃物を扱う危険を知り、火の怖さを学び、火の扱いを覚え、母親の仕事を学び、家族連帯の土台となっていた。そして、人間生きて行く為には煩雑な仕事が必要だと自然に学んだ。その行為を電気釜が奪ってしまった。電気釜以後、子供の仕事「薪割り」が消え、朝、母親に合わせて起きることも消え、共同作業も消えた。電気釜に大きな時代の落とし穴があった。

最近ガバイバアチャンで有名になった洋七氏が、「バアチャンがまずオクドでご飯を炊くことから教えてくれた。新築の家にまずオクドを作った。」と話していた。オクドが人間生活の根源に関わっていたことの証しとして、ガバイバアチャン（洋七氏）に拍手を送りたい。



電気釜